

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	李 慧
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 坂口安吾文学における戦争観—同時代の中国作家との比較を視座に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 佐藤 利行		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 溝渕 園子		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 有元 伸子		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	首都師範大学・教授 李 均洋		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、坂口安吾の文学について、戦時下と戦後との文学活動を通じ、安吾の戦争観を分析したものである。論文は、序章、第一章「坂口安吾のアジア太平洋戦争観」、第二章「戦時から戦後へ」、第三章「中国の歴史家と文学者の日中戦争観」、終章の全五章から構成されている。</p> <p>序章では、本研究の動機・目的を論じ、坂口安吾の生涯を概観しアジア太平洋戦争の歴史的意義について述べる。</p> <p>第一章では、『盗まれた手紙の話』と『イノチガケ』を取り上げて坂口安吾の「アジア太平洋戦争観」について論述する。『盗まれた手紙の話』では、作品中の精神病患者は社会からの逸脱者を意味し、健常者は社会規範の服従者を表象するとし、安吾が精神病院という体制に統制されない空間を作り出したことが当時の文化統制への抵抗であり、そこから安吾の戦争への否定、平和への期待を伺うことができる。安吾の最初の歴史小説である『イノチガケ』では、前編において数多くの殉教者と宣教者に、安吾は「狂気」というラベルを貼る。戦時下、「皇国史観」に基づいて死を強要された兵士たちと殉教者とを安吾は同格とし、キリスト教信者の無言の抵抗は、戦時下の安吾自身の抵抗を示唆していると論じる。後編における新井白石の「探究精神」は合理主義の表象であり、「殉教精神」の対局にあったとする。</p> <p>第二章では、第一節で『外套と青空』『女体』『不連続殺人事件』を取り上げて坂口安吾における戦後社会の実相を探る。『外套と青空』は、戦時下の家制度の脆さと戦後の民主改革による家制度の崩壊の接合を意味する作品であるとする。『女体』では描かれる女性像の中に、民主化改革による「解放」の思想が流れていると述べる。『不連続殺人事件』における遺産相続、再婚・離婚の問題は、天皇制国家の支柱であった家制度が新憲法によって廃止されたことに集約でき、それはGHQによる民主化改革を表象すると分析する。第二節では『神サマを生んだ人々』『狂言遺書』を取り上げる。『神サマを生んだ人々』では、民衆の神への狂信を描き、天皇が再び戦争に利用されることへの恐怖を訴えたと述べる。『狂言遺書』では秀吉の朝鮮出兵と太平洋戦争を重ね合わせ戦争の悲惨さ、戦災孤児の問題などを訴えたと論じる。</p> <p>第三章では、第一節で中国の歴史家の歴史観を概観する。第二節では満洲事変に関する文学として端木蕻良、蕭紅、蕭軍を取り上げ、第三節では上海事変と南京陥落に関する文学として阿瓏、夏衍を取り上げ、安吾と同時代の中国の作家の戦争文学と安吾文学との相違点、共通点などについて考察する。</p> <p>終章では、本論文のまとめを行い、本研究の過程で明らかになった問題点・課題などについて述べる。</p>			

以上述べたように、本論文は坂口安吾の7作品を取り上げてそれを詳細に分析し、安吾文学における戦争観を丁寧に論述している。戦争批判の本質は自由を奪うものへの抵抗であり、戦後の日本がGHQによって家制度から、また中国が日本軍の侵攻によって地主から解放されたという指摘や、安吾にとっての反戦の意義を明らかにしようとした点は高く評価できる。政治的背景が大きく影響する戦争観を歴史学の成果を取り入れることによって、更に充実した研究に発展させることが期待される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)